

行きゆき

入江相政

短歌研究社刊

行きゆきて

入江相政

短歌研究社刊

著者略歴

明治三十八年六月二十九日、東京港区に生まれた。
東京大学文学部国文学科卒業。
学習院講師、同教授を経て昭和九年侍従。現、宮内庁侍従次長。



随筆

行きゆきて

定価八八〇円

著者

入江 相^{すけ}政^{まさ}

発行者

東京都千代田区三番町二一五
小野 昌 繁

発行所

短歌研究社
東京都千代田区二番町八番地
電話（二六）八六七八番
振替（東京）二四三七五番

印刷者 神谷秀雄
製本者 山田五郎

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

昭和四十四年六月一日 発行 ©

目次

むらさめの	九
ごもつとも	三
海にして	七
春浅み	二
事果てて	二五
そのころは	元
いのちとは	三
かき霧らし	七
墨繩を	四
うたかたの	四
ことくにの	四
城を出でて	五
年のうちに	五
春の酒	六

夕されば

壹

水も春に

充

妖しくも

三

風薫る

七

水茎の

八

祭りとは

全

折節の

允

言わぬいろ

壹

年の瀬は

七

ひきぎわを

一〇二

あらがねの

一〇五

たちねの

一〇九

魔女にうたれ

一一三

鳥の世は

一二七

さわやかに

一三三

うたかたの

一三五

木もれ日の 一三

わたのはら 一三

秋の風 一七

あるにあらぬ 一四

わが友は 一四

囚われの 一四

春の雨 一五

類をもとむ 一五

おもしろうて 一六

川風に 一六

行きゆきて 一六

いつの世も 一七

うちよする 一七

箱根路を 一八

あそびとは 一八

この意地を 一八

今ようは

一九三

あくがれて

一九七

すたれ馬

二〇二

友にわかれ

二〇五

迷い鳥

二〇九

竹芝の

二二三

東走る

二二七

人の秋

二三二

生けるごと

二三五

みずはぐむ

二三九

渋かろが

二四三

たまきはる

二四七

海のかなた

二五一

おもしろの

二五五

とわのもの

二五九

すがすがし

二六三

夏やせに 二七

栄えいのる 二六

走りつつ 二五

雪虫は 二六

あとがき 二三

題字 入江相政

表紙絵 石原益夫

装幀 木俣修

行きゆきて

むらさめの

年ごとに、「正月」というものに対する感動は弱まる。もちろん大晦日に、暮れてゆく庭を見たりしていれば、なにがしかの感慨を抱かないわけではない。しかしティーンエイジのころのあの思いにくらべると、このごろはいかに無感動であるか、本当に驚かずにはいられない。「もういくつ寝るとお正月」。あの歌は、あの頃のわれわれの心をそのままに描いている。この歌の通りの喜びを胸に抱けるのは、私ではもちろんなく、私の息子や娘でもなく、なんとそれは孫たちであることになった。

昔の東京の街は静かだった。門松の横で、みんな羽子をついていた。紋付に二重まわしというようにでたちで歩いていると、横つつらを張り倒されそうに、羽子板が飛んできた。羽子板の押し絵は、豊国描くところのお姫さまであったり、羽左の与三であったり、梅幸の辰橋であったり。そういう分厚な押し絵の羽子板で、長い袖をひるがえしては突いている結い綿娘に、大の男がさんざんにひねられて、ほったやひたいに、墨を塗られたりしていた。

今とちがって、その横を通るのは、年賀の人か人力車。人力にはラッコのえりの外套、山高帽をベコベコにへこまして、酔いづぶれたおっさんが乗っていた。往来を通るのは、このほかには自転車の小僧だけだから、どうまちがっても、羽子板を胸にだいたまま、轢き殺されるといふような心配はなかった。

今とはもとより、学生時代でも、『金色夜叉』を面白いと思ったことはなかった。鏡花が「先生は、先生は」と、心からなる尊敬をささげつつ、紅葉の思い出を、ラジオで語ったりしていたが、この鏡花には、今でも深い敬意を払うが、師匠の紅葉はどうも。けれども紅葉が、『金色夜叉』に書いた「かるた会」は、大正年間にも大いに行なわれた。中学時代なんか、あんまりやり過ぎたために、夜おそく床にはいつてからも、まっ暗やみの中に、カルタが何枚もちらついて、なかなか寝つかれないことがあった。

カルタはずいぶん好きで大学を出てからもやった。方々のうちへも遠征した。『金色夜叉』に書かれたようなカルタ会は、当時としては、数少ない恋愛の温床だったのに、そっちのほうでは武運つたなく、美しい夢のひとつすら持つことが出来なかった。

勝負ごととは本来好きでなく、いくらかやったのは将棋とカルタだけ。麻雀は大正七、八年のころ、上海がえりの人から、牌と英文の規則書をもらったのを、一所懸命に解説して、兄や従兄らとやった。いわば草分けなのだが、つまりは私の好みに合わなかった。

勝負ごとの好きな人に、私は同情の念を持つ。目の色を変えて牌を持ち、温泉宿にとまりながら、ろくすっぽ湯にもつからずに、なぜ徹夜麻雀をしなければならないのか。

あと十五分ほどで宴会がはじまるという、その十五分を、どうして暮れゆく山々を、ぼんやり見ているわけにはいかないのか。こういう時に、将棋の駒をならべ、碁^この蓋^{ふた}を取る人をあわれに思う。マスコミの友人は云う、麻雀をやらない人の気が知れないと。両方で気が知れないといっているのだから世話はない。

勝負ごと一般、大体このようなことであるのに、どういふものかカルタだけは例外で、カルタなら今でもやりたい。けれどもこれももうダメになった。カルタ会があると、よく東宮御所へ招んでいただいた。今から十年も前のこと、東宮侍従長の山田君と組んで、ずいぶん派手にはたらいしたこともあった。昔とったきねづかで、ちょっとした花形だった。それなのに身の衰えはまず眼にきた。軽い近視と乱視のある私の目、老眼の傾向のために、軽度の近視は帳消しになったから、新聞、雑誌は眼鏡をはずさなければ読めない。このごろ本屋へ行くと大変で、大きな本棚を大観するには、眼鏡が無ければならないが、一冊を取り出して、仔細に見るためには、眼鏡をはずさなければならぬ。カルタの場合も、わが陣営を見るのには、眼鏡をはずしたほうがいいが、敵の陣営をねらうのには、眼鏡無しではどうにもならない。

「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」。この一枚札といわれるものは、読み手が最初の「む」の一

音を発音しただけで、それが敵の所にあるが、自分の所にあるが、目にもとまらぬ速さで「きりたちのぼるあきのゆふぐれ」の札を、次の間まで飛んでいくような勢いで、はねとばさなければならぬ。「つゆもまだひぬまきのはの」と読み終るころには、敵も身方も、乱れた札を整理している。「む」だけでは無理としても「む」と「ら」との間ぐらいで、はねとばさなくては話にならない。

この歌が寂蓮法師の作であるとか、『新古今集』に出ているとか、それらはみんな無縁のこと。百首の歌には意味も無ければ命も無い。寸断された音のいくつかがあるだけ。ツーといえどカーというたとえのように、「む」とくれば「き」をはねとばすだけのこと。カルタを取っている瞬間は、歌に命が無いばかりでなく、取っているのも人間ではないかもしれない。

このような真剣勝負に、一枚ごとに、眼鏡をかけたらずしたりでは、てんから話になりやあしない。このごろでも、東宮御所のカルタ会はつづいていられるらしいのに、もう私を招んでくだらないのはそのためである。そういうわけで引退してから、もう十年にもなろうとしているのに、百人一首を読むあの節、節というような抑揚はなんにもない、あの静かな棒読みの高い声を耳にすると、「わが青春」はたちどころによみがえって、強く胸に突き刺さる。いくらあせても、昔のようにには取れないのだから一層である。

雀百まで。

ごもつとも

京都の吉田神社。吉田神道で歴史的にも有名な社だが、今は節分の夜にすべてを託することになっている。吉田神社ほどではなく、また節分というものに、それほどの因縁がなくても、このごろでは寺も社も、毎年趣向をこらして、客寄せに余念がない。

その時々の人気力士、流行歌手に、袴を着せて豆をまかせる。年男のまいた豆をひろうと縁起がいいことになっているし、あわせてその機会に、人気絶頂の美男、美丈夫の顔も見られるというのだからこたえられない。ミーちゃんもハーちゃんも、どっと押し寄せて、七色の声をふりしぼる。そのところがその寺、その社のねらいというものである。

識者はこれをにがにがしいことに思う。商策にはしり過ぎたこの種の企画、それが信仰というものに、なんのかかわりもない点を非難するのだが、こんなことをとがめだてしてみたところで、本来の信仰心をつなぎとめることが出来るわけでもないのだから、多くの人が喜ぶのなら別にさしつかえもないじゃあないか。それに人気者とか、美男、美女とかいうものは、出来

るだけその姿を大衆の前にさらして、その目を楽しませる義務のようなものを持っているのであるから。

それにこの豆まきというものが、もともとなにもこわいような厳肅な儀式というのではなく、仕合わせを家の中によび、不幸はそとに追い出そうという、かわいらしい民間の習俗に過ぎないので、宮中の歌会始に歌を出した人に、記念として、サイン入りの大鵬のプロマイドをくばるとか、二月堂のお水取りの人寄せに、朝丘雪路に歌わせるとか、そんなことではないのだから。去年の節分の晩は、われわれはたまたま日本橋で飲んでた。高島屋の横の飛鳥という料亭。主人の南波武男氏が、終戦直後の焼野に建てて、少しは日本人が、「飛ぶ鳥のあすかの代の人ごころを思い出してくれたら」との、祈りをこめてつけた屋号である。木俣修さんと福田清人さんと私とが、折々ここで飲むことになっているのは、南波さんの好意によるもの、なんの目的もなく、なんの取り引きもないこの雅会を、この上もなく楽しんでる。去年の二月三日、だんだん飲み進むうちに、遠く近く聞えてくるのは「福は内、鬼は外」。その席にも、ゆたかに豆を盛った、一升枡がとどいた。丁度土曜日のことで、「飛鳥」も平日よりはいくらか静かだったし、それに夜も更けて、ほかの座敷のお客さんも、あらかたかえったので、「よし一丁豆をまこう」ということになった。江州彦根三十五万石の御家老の家にうまれた木俣さんを先頭に、キシタンバテレンの長崎びとの福田さんと、公卿くずれの私とがあとにつづいて、